奥の細道（松尾芭蕉）

『おくのほそ道』は、元禄文化期の俳人松尾芭蕉による紀行文。元禄 15 年（1702 年）刊。日本の古典における紀行作品の代表的存在であり、作品中に多数の俳句が詠み込まれている。芭蕉は弟子の河合曾良を伴い、元禄 2 年 3 月 27 日（新暦 1689 年 5 月 16 日）に江戸深川の採荼庵（さいとあん）を出発し、約 150 日間で東北・北陸を巡って元禄 4 年（1691 年）に江戸に帰った。「おくのほそ道」では、このうち武蔵から下野、岩代、陸前、陸中、陸奥、出羽、越後、越中、加賀、越前を通過して旧暦 9 月 6 日に美濃大垣を出発するまでが書かれている。
「奥の細道」とも表記されるが、中学校国語の検定済み教科書ではすべて「おくのほそ道」の表記法をとっている。

藤原義久作曲「奥の細道」《夏・・・もがみ川》

原曲はテノール独唱とピアノのための歌曲であるが、2013 年、女声合唱団ヴォーチ・アミーケの第 14 回定期演奏会のために、声とピアノのための語りとして編曲され、指揮：永友博信、ピアノ：竹内理恵によって演奏された。
以下は藤原義久氏が「奥の細道」の中から「大石田」「最上川」「鶴岡・酒田」の章に 3 つの句（1 句は古今和歌集からの引用）を織り交ぜて詩句とした。
また、指揮者により、「奥の細道」の序章の一部が、演奏前の「語り」として引用された。

「序章」（語り）

月日は百代(はくたい)の過客(かかく)にして、行きかふ年もまた旅人なり。
舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老(おい)をむかふるものは、
日々旅にして旅を栖(すみか)とす。

月日は百代という長い時間を旅していく旅人のようなものであり、その過ぎ去って行く一年一年もまた旅人なのだ。
船頭のように舟の上に生涯を浮かべ、馬子のように馬の轡（くつわ）を引いて老いていく者は日々旅の中にいるのであり、旅を住まいとするのだ。

以下**太字**は歌唱部分（「　　」部分は旅程）/ 斜体文字は俳句

「大石田」

最上川乗らんと、大石田といふ所に日和(ひより)を待つ。

最上川の川下りをしようと思い、大石田という場所で天気がよくなるのを待った。

五月雨を集めて涼し最上川

5 月 28 日：馬を借りて天童に出る。ここで内蔵宅に立ち寄ってもてなされる。
午後 3 時、大石田 高野一栄宅に到着。疲労のため句会を中止した。
5 月 29 日：夜になり小雨が降る。この日、「**五月雨を集めて涼し**」の発句で始まる四吟歌仙を巻く。
5 月 30 日：朝のうち曇。8 時ごろから晴れる。芭蕉は近くを散策の後、物書き。
6 月 1 日：大石田を出発。舟形町を経由して新庄市に入る。新庄に一泊。新庄の「風流」宅に宿泊。
6 月 2 日：新庄に滞在。昼過ぎより盛信宅に招かれる。盛信は昨日の風流の本家筋に当る。
ここで「**風の香も南に近し最上川**」を詠む。
6 月 3 日：太陽暦では 7 月 19 日。新庄を出発。天気快晴。
川舟にて羽黒へ。この川舟の上で「**集めて早し**」となったという。

「ここに古(ふる)き誹諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔を慕ひ、芦角(ろかく)一声(いっせい)の心をやはらげ、この道にさぐりあしして、新古(しんこ)ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなければ」と、わりなき一巻(ひとまき)残しぬ。
このたびの風流ここにいたれり。

かつてこの地に談林派の俳諧が伝わり、俳諧の種がまかれ、それが花開いた昔のことを、土地の人は懐かしんでいる。
葦笛を吹くようなひなびた心を俳諧の席を開いて慰めてくれる。
「この地では俳諧の道を我流でさぐっているのですが、新しい流行の俳諧でいくか、古い伝統的なものでいくか、指導者がいないので決めかねています」と土地の人がいうので、やむを得ず歌仙を一巻残してきた。
今回の風流の旅は、とうとうこんなことまでする結果になった。

風の香も南に近し最上川

６月２日、風流の兄で本家の渋谷九郎兵衛（俳号、盛信）に招かれた。芭蕉は前日眺めた猿羽根峠の眼下を流れる最上川から着想したと思われる発句「風の香も南に近し最上川」を詠み、主人のもてなしへの挨拶とした。
白楽天の詩「薫風は南より至る」を引用した挨拶吟。盛信の亭は、最上川が南を流れ、南が大きく開けている。
暑い盛りなのに、南を流れる最上川から猿羽根峠を越えて吹き渡ってくる香りのある風の涼しさが身にしみて感じられる、との意。

「最上川」
最上川はみちのくより出でて、山形を水上(みなかみ)とす。
碁点（ごてん）隼（はやぶさ）など言ふ、おそろしき難所(なんじょ)あり。
板敷山(いたじきやま)の北を流れて、果ては酒田の海に入（い）る。
左右山覆(おお)ひ、茂みの中に舟を下(くだ)す。
これに稲つみたるをや、稲船(いなぶね)といふならし。

最上川の源流は陸奥であり、上流は山形である。碁点・隼などという、恐ろしい難所がある。
歌枕の地、板敷山の北を流れて、最後は酒田の海に流れ込んでいる。
左右に山が覆いかぶさって、茂みの中に舟を下していく。
これに稲を積んだものが、古歌にある「稲船」なのだろうか。

最上川上れば下る稲船のいなにはあらずこの月ばかり（古今和歌集・東歌）
第一句（最上川）から第三句（稲舟の）までは序。・・・上れば下る（稲を運ぶ舟が行き交う様、転じて、お互いの心が通いあって愛を受け入れている。）
「**いなにはあらずこの月ばかり**」・・・（男から肉体関係を迫られた女が）嫌（否）ではないけれど、今は月の障りがあるからと拒んでいる。（丸谷才一はじめ多くの解釈）「この月」を「今月」と綺麗にまとめる解釈もあるが、それでは、「何故、今月はダメ？」と意味不明な句になってしまう。
そもそも「東歌」は「万葉集」「古今和歌集」に収められた古代東国の歌で、歌はすべて短歌形式で、作者名を記さない。文学上の特色は地方性，民謡性に求められ，粗野で大胆な表現，生活的な素材、豊富な方言使用などにより独自の世界をなしているものであるため、丸谷才一側の解釈が正しいと思われる。

白糸の瀧は青葉の隙隙(ひまひま)に落ちて仙人堂 岸に臨(のぞみ)て立つ。
水みなぎつて舟あやうし。

有名な白糸の滝は青葉の間間に流れ落ちており、義経の家臣、常陸坊海尊をまつった仙人堂が岸のきわに建っている。
水量が豊かで、何度も舟がひっくり返りそうな危ない場面があった。

五月雨を　あつめて早し　最上川

大石田の高野一栄方に滞在中、四吟歌仙の発句として作ったものの改作です。初案は「集めて涼し」で、涼しい風を運んでくる最上川の豊かさやさしさを表現しました。しかし、本合海から急流の最上川下りを体験し、「涼し」を「早し」に改め、最上川の豪壮さ、激しさを表記したのです。

句意は「降り続く五月雨（梅雨の雨）を一つに集めたように、何とまあ最上川の流れの早くすさまじいことよ。」

「鶴岡・酒田」

暑き日を　海に入れたり　最上川

6 月、酒田の寺島彦助亭で、歌仙の発句として作った。
句意は「(ようやく夕方になったが、) 暑い一日を海に流し入れてしまった最上川（その河口のあたりから涼しい夕風が吹いてきた)」